台大日本語文研究第 16 期
2008 年 12 月，頁 33-60
2008-11-23 收稿，2009-01-19 通過刊登

中島棕隱的棕櫚詩
—從中日比較文學的觀點談起—

朱秋而*

摘要

近世後期（1779～1855）與賴山陽（RAI SAN-YO）並稱，同爲京都詩壇代表文人的中島棕隱，又叫文吉，對棕櫚賞愛有加，更以棕隱之雅號廣爲人人知。《水流雲在樓集》是詩人生前最後出版的詩集，書中吟詠「棕櫚」的詩作計有六首，內容如下：

秋後偶訪平井宗七、時園丁修花欄、其間唐棕櫚一株、老幹丈許、健綠異凡。余賞之不已、宗七憐余棕癖、割愛而移贈、乃謝以一絕。

①嘗將駑骨比幽棕 逸氣聊存老綠中 今日省吾堪共愧 新來美鬣一羣空
自注：棕櫚一名鬣葵。

咏棕櫚五首

②嘗愛棕櫚種幾株 自珍斯癖古今無 請看健綠亭亭色 常免他人問菀枯

③吐花非有茝蘭臭 結子亦無桃杏仁 灑雨揮風總閒氣 誰知爛漫信天真

④休將品格伍芭蕉 勁直高疏有所超 卻笑輞川奇雪下 畏斯傲骨不勝描

⑤老後貪癡縱有箴 何於野卉不從心 移栽屢累詩僧手 牕下添成半畝陰

* 台灣大學日本語文學系副教授

⑥佛邊嘗自乞慈陰 高翠更資禪悅心 慣看露霜無染色 夙興每不戀溫衾
自注：錦莊卜築之初，詩弟子末了、祖球、崇玄、星洲輩各贈棕櫚數株二首及焉。

本論文想透過和漢資料的仔細分析解讀，釐清素有「文妖」之稱的棕隱如何發揮其過人的詩人本領，而將原本不受中日漢詩文重視的素材「棕櫚」詠成清新動人的作品，並在江戶後期詩壇佔有一席之地。

關鍵詞：中島棕隱、棕櫚、漢詩、和歌、俳句

NAKAJIMA SOU-INN"S POEMS ABOUT PALMS
--- From the Viewpoint of Comparative Literature between Chinese and Japanese

JU, Chiou-er*

Abstract

In the late period of modern times, Nakajima Sou-Inn, named 文吉 as well, who had the same prestige and talent as 中島棕隠(1779-1855), especially appreciated palms. Both of them were the representatives of Kyto poetry school.《水流雲在樓集》is the poetry collection which was published last in his life. There are six poems which depict and praise the palms.

"I visited 平井宗七 by chance after fall when the gardener was trimming the fence. In the fence was a palm tree, which was about three and a half meters tall and extraordinarily healthy and green. I appreciated it deeply; therefore 宗七 pities me as a palm addict and gave up what he treasured to give me as a present. Thus I thanked him with a poem."

With carefully analyzing and studying the Chinese and Japanese data, this thesis is to distinguish how Nakajima Sou-Inn, who was named "literary enchanter," developed his remarkable talents and how he used palms, which were not valued in Chinese and Japanese poems, as a new material to compose fresh and touching poems. Because of this, he held an important position during the late Edo Era.

Keywords: Nakajima Sou-inn, Palms, Chinese poems, Waka, Haiku

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

中島棕隠の棕櫚の詩について
―日中比較の視点から―

朱秋而*

要旨

近世後期（1779～1855）頼山陽と並んで京都詩壇を代表する才人中島棕隠は通称文吉で棕櫚をこよなく愛し、棕隠という雅号で広く知られている。最後の詩集となる『水流雲在楼集』に棕櫚を詠んだ詩が六首見える。次のようなものである。

秋後偶訪平井宗七、時園丁修花欄、其間唐棕櫚一株、老幹丈許、健緑異凡。余賞之不已、宗七憐余棕癖、割愛而移贈、乃謝以一絕。

①嘗將駑骨比幽棕 逸氣聊存老綠中 今日省吾堪共愧 新來美鬣一羣空
自注：棕櫚一名鬣葵。

咏棕櫚五首

②嘗愛棕櫚種幾株 自珍斯癖古今無 請看健綠亭亭色 常免他人問菀枯

③吐花非有茝蘭臭 結子亦無桃杏仁 灑雨揮風總閒氣 誰知爛漫信天真

④休將品格伍芭蕉 勁直高疏有所超 卻笑輞川奇雪下 畏斯傲骨不勝描

⑤老後貪癡縱有箴 何於野卉不從心 移栽屢累詩僧手 牕下添成半畝陰

⑥佛邊嘗自乞慈陰 高翠更資禪悅心 慣看露霜無染色 夙興每不戀溫衾
自注：錦莊卜築之初，詩弟子末了、祖球、崇玄、星洲輩各贈棕櫚數株二首及焉。

* 台湾大学日本語文学系副教授

小論は「文妖」とも言われる棕隠は「棕櫚」という古来日中の詩歌に余り注目されなかった素材をいかに生かし､詩人の腕を振るい、清新な詩風を形成したのかを和漢の資料を分析しながら、その一端を明らかにしたいものである。

キーワード：中島棕隠、棕櫚、漢詩、和歌、俳句

中島棕隠の棕櫚詩について
―日中比較の視点から―

朱　秋而

はじめに

近世後期頼山陽と並んで京都詩壇を代表する才人中島棕隠（1779～1855）は通称文吉で棕櫚をこよなく愛し、棕隠という雅号で広く知られている。最後の詩集となる『水流雲在楼集』[1]に棕櫚をテーマに詠んだ詩が六首見える。次のようなものである。

秋後偶訪平井宗七、時園丁修花欄、其間唐棕[2]櫚一株、老幹丈許、健緑異凡。余賞之不已、宗七憐余棕癖、割愛而移贈、乃謝以一絕。

①嘗將駑骨比幽棕 逸氣聊存老綠中 今日省吾堪共愧 新來美鬣一羣空
自注：棕櫚一名鬣葵。

咏棕櫚五首

②嘗愛棕櫚種幾株 自珍斯癖古今無 請看健綠亭亭色 常免他人問菀枯

③吐花非有茝蘭臭 結子亦無桃杏仁 灑雨揮風總閒氣 誰知爛漫信天真

④休將品格伍芭蕉 勁直高疏有所超 卻笑輞川奇雪下 畏斯傲骨不勝描

⑤老後貪癡縱有箴 何於野卉不從心 移栽屢累詩僧手 牕下添成半畝陰

⑥佛邊嘗自乞慈陰 高翠更資禪悅心 慣看露霜無染色 夙興每不戀溫衾
自注：錦莊卜築之初，詩弟子末了、祖球、崇玄、星洲輩各贈棕櫚數株二首及焉。

---

[1] 『中島棕隠集』上方藝文叢刊６、所収『水流雲在楼集』による、1980 年、刊行会。

[2] 『水流雲在楼集』には棕の本字である「椶」が使われているが、小論では本字のところをすべて常用漢字の「棕」で表記する。

「文妖」とも言われる棕隠は「棕櫚」という古来日中の詩歌に余り注目されなかった素材をいかに生かし、詩人の腕を振るい、清新な詩風を形成したのかを和漢の資料を分析しながら、その一端を明らかにしたいと思う。

一、棕隠の「棕櫚」描写

さて、棕隠と「棕櫚」の係わりについて野間光辰は次のように述べている。

> 天保三年（1832）三月、棕隠五十四歳にして始めて家持となった。鴨川二条大橋の北東聖護院領の錦織郷の地、いわゆる「錦織草廬」である。園池を構え、愛する棕櫚の木や牡丹を植え、毎年三月知友を招いて花見を催した。また座敷の後の二階屋を「銅駝余霞楼」と名づけ、棕隠自ら庖丁を振って訪客を饗した。「どうだ、よかろう」という洒落である。[3]

確かに前掲①

> 秋後偶訪平井宗七、時園丁修花欄、其間唐棕櫚一株、老幹丈許、健緑異凡。余賞之不已、宗七憐余棕癖、割愛而移贈、乃謝以一絕。
>
> 嘗將駑骨比幽棕 逸氣聊存老緑中 今日省吾堪共愧 新來美鬣一羣空
>
> 自注：棕櫚一名鬣葵。

詩題に「宗七憐余棕癖」と見えるように、棕隠は友人の前でわざと自分の「棕櫚」愛好をと卑下して言いながら、

②嘗愛棕櫚種幾株 自珍斯癖古今無 請看健緑亭亭色 常免他人問菟枯

の詩の前半はわざと自分の趣味の特殊性を強調し、嘗てない素材の新しさが先ず読者の目を引くだろう。続けて棕隠が知人から一本の棕櫚の木を贈られた詩①の内容を分析してみよう。

「駑骨」つまり自分を「幽棕」に譬えて、気高い志は深い緑色の葉に潜んでいる。一首の後半は棕櫚は別名「鬣葵」とも呼ばれるから、新しく移植してきた棕櫚の美しさを「美鬣」に見立てて褒め称

[3] 『日本古典文学大辞典』第四巻、P.509、1984年、岩波書店。

えている。短い七言絶句であるが、常緑樹の「棕櫚」を表情豊かに生き生きと捉えていると言えよう。

「咏棕櫚五首」連作の第一と第二首は次のように詠まれている。（読み下しと現代語訳は水田紀久氏の『葛子琴 中島棕隠』江戸詩人選集６、岩波書店に従う）

嘗愛棕櫚種幾株　　嘗て棕櫚を愛し　幾株かを種う
自珍斯癖古今無　　自ら珍ず　斯の癖　古今無きを
請看健綠亭亭色　　請う看よ　健緑　亭亭の色
常免他人問菀枯　　長に免がる　他人の菀枯を問うを

しゅろ数株を今まで大事に栽培して来たが、われながらしゅろ好きとは随分の奇癖で、古今未曾有と言えるほどめずらしかろう。見給え、この青々とそそり立つたくましいしゅろの樹勢を。平生人から枯れたか否かなどとたずねられることもない。二首目は

吐花非有蓝蘭臭
結子亦無桃杏仁
灑雨揮風總閒氣
誰知爛漫信天真

しゅろは花に「蓝蘭」の香りなく実に桃杏の大きさこそないが、性格は天真爛漫である。三首目は

休將品格伍芭蕉
勁直高疏有所超
卻笑輞川奇雪下
畏斯傲骨不勝描

とあり、品格は芭蕉に並び、その勁直疏闊さはむしろそれにまさるところがある。三句目の「輞川」は盛唐詩人・画家王維の別荘の所在地で、詩人は棕櫚の傲岸不屈な気性を恐れてかの有名な「輞川図」に棕櫚を描けなかったと。中国南宗画の祖とも言われる王維を引き合いに出して、棕櫚を文人世界の最高の植物として大いに賞賛する。

そして第四首は

老後貪癡縦有箴
何於野卉不従心
移栽屢累詩僧手
牕下添成半畝陰

と老後の戒めには時宜を得た庭樹として、書窓のもとに半畝の陰を落す、わが雅号の拠り負うこの樹をいとおしんだ。最後の一首は

佛邊嘗自乞慈陰
高翠更資禪悦心
慣看露霜無染色
夙興毎不戀溫衾

自注：錦荘卜築之初，詩弟子末了、祖球、崇玄、星洲輩各贈棕櫚數株二首及焉。

棕隠の「錦織草廬」の完成を祝って、自注に記したように僧侶の詩弟子たちが数株のしゅろを贈ってきた。しゅろと仏門とゆかりを匂わせる一首である。

決して長くない六首の絶句であるが、棕櫚という題材を印象深くしかも面白く捉えていたと思う。これは果たして棕隠独得なものなのかを、先行の和漢の詩文和歌などに照らし合わせて考えてみよう。

二、中国詩文に見る「棕櫚」「棕花」

先ず、棕隠以前の日中の漢詩人は素材として「棕櫚」やその花「棕花」をどのように利用し、詠んでいたのかを確認しながら、棕隠の棕櫚詩との異同を考え、その特徴を浮き彫りにしたいと思う。「棕櫚」と「棕花」に分けてそれぞれ中国の時代順で用例を見てゆくことにする。

（一）「棕櫚」について

中国の古い文献における「棕櫚」の記述を見てみたい。『太平御覧』

巻九五九・木部八「栟櫚」の項目に次のようなものが見られる[4]。

「広雅曰、栟音并、櫚棕也。」

「広志曰、棕一名栟櫚、葉似車輪、乃在樹下、下有皮纏之附地起、二旬一採、転復上生。」

「説文曰、椶一名蒲葵」

上の記述で見ると、「葉似車輪」や「一名蒲葵」など基本的な認識は確立された。初唐の過渡期を経て、いよいよ古辞書類の記述から飛躍して「棕櫚」は文学、特に韻文学に登場してくると思う。管見の限りでは、杜甫『杜工部集』[5]所収の「枯棕」詩が一番古い用例のようである。次に掲げてみよう。

（例１）蜀門多棕櫚 高者十八九
其皮割剝甚 雖眾亦易朽
徒布如雲葉 青黃歲寒後
交橫集斧斤 凋喪先蒲柳
傷時苦軍乏 一物官盡取
嗟爾江漢人 生成復何有
有同枯棕木 使我沈歎久
死者即已休 生者何自守
啾啾黃雀啅 側見寒蓬走
念爾形影乾 摧殘沒藜莠

枯れた「しゅろ」を詠んだこの「枯棕」詩は、「病橘」と「枯栟」と一緒に配列される有名な連作である。後世の詩論書にもしばしば取り上げられる。例えば『石林詩話』云、

病栢・病橘・枯椶・枯栟、皆當時事病。

また、『竹莊詩話』[6]巻五

栢當為明皇、作與杜鵑行意同。枯棕皆民力之殘困、其篇中自言矣。枯栟云、猶含棟梁具無復雲霄志、當為房次律之徒作。惟病

[4] 『太平御覧』全四冊、1960 年、北京・中華書局。
[5] 『杜詩鏡詮』楊倫編、1998 年、藝文印書館。
[6] 『竹莊詩話』宋・何汶撰、1984 年、北京・中華書局。

橘始言惜哉、結實小酸澁如棠梨、未以比荔枝、勞民疑若指佞倖之不得志者。自漢魏以來詩人用意深遠、不失古風、惟此為然、不但語之工也。

詩話に評された通り、杜甫のこの連作は政治や社会を批判する諷喩詩の部類に属し、特に詩題の「病む・枯れる」を見れば、棕隠の常緑しゅろと大きくかけ離れていることは一目瞭然である。王昌齢には「題僧房」[7]（『万首唐人絶句』巻十一）があり、

（例２）棕櫚花満院　苔蘚入閑房
彼此名言絶　空中聞異香

なじみのない棕櫚の花の香りは、いかにも閑静な僧房に似つかわしいものだと詠んでいる。そして、時代が降って、中唐に入ると、韋應物の『韋蘇州集』[8]巻十「棕櫚蠅拂歌」

（例３）棕櫚為拂登君席　青蠅撩亂飛四壁
文如輕羅散如髮　馬尾氂毛不能絜
柄出湘江之竹碧玉寒　上有纖羅縈縷尋未絶
左揮右灑繁暑清　孤松一枝風有聲
麗人紈素可憐色　安能掩白還為黒

韋應物は棕櫚の繊維で作った払子を描いている。棕櫚の実用的な一面を捉えたこの詩は棕櫚詩のもう一つのパターンを作り、後の中国詩人に多大な影響を与えている。少し後の白居易の「西湖晩帰回望孤山寺贈諸客」[9]詩には

（例４）柳湖松島蓮花寺　晩動歸橈出道場
盧橘子低山雨重　棕櫚葉戰水風涼
煙波澹蕩搖空碧　樓殿參差倚斜陽
到岸請君回首望　蓬萊宮在海中央

頷聯の「盧橘子低山雨重、棕櫚葉戰水風涼」で西湖ほとりの情景を夏蜜柑と棕櫚の葉で描いている。『和漢朗詠集』[10]巻上の「橘花」の

[7] 『万首唐人絶句』清・王士禎編、1981年、台北・藝文。
[8] 『韋蘇州集』須渓先生校本、2006年、北京図書館出版。
[9] 『白氏文集歌詩索引』、平岡武夫・今井清編、1989年、同朋舎。
[10] 『和漢朗詠集』日本古典文学集成、大曽根章介・堀内秀晃校注、1993年、新

項目にも収録されるところから見れば、恐らく平安歌人に一定の影響を与えていただろうと思われる。

それに晩唐詩人の皮日休の『松陵集』[11]巻八「冬暁章上人院」

（例５）山堂冬暁寂無聞　一句清言憶領軍
琥珀珠粘行處雪　棕櫚箒掃卧来雲
松扉欲啓如鳴鶴　石鼎初煎若聚蚊
不是戀師歸去晩　陸機茸内足毛羣

上人の寺を「琥珀珠」と「棕櫚箒」きれいな対句で描写している。「棕櫚」を法師の僧院の描写に使ったもう一つの用例となる。同じ晩唐の釋貫休の『禪月集』[12]巻十九には「道中逢乞食老僧」詩にも見られる。

（例６）赤棕櫚笠眉毫垂　拄杪栗杖行遲遲
時人秖施盂中飯　心似白蓮那得知

調べた限りでは、「棕花」を扱った作品は次で検討するが、うえに挙げたように唐代詩人が「棕櫚」を取り入れた用例はほんの数例しか見出すことが出来なかった。しかし、詩の素材として「棕櫚」は確かにマイナーな存在ではあるにもかかわらず、一方、中国屈指の大詩人杜甫が「枯棕」篇を詠んだことによって、無視できない素材ともいえる。盛唐の王昌齢「題僧房」を始め、中晩唐以降例えば白居易「西湖晩帰回望孤山寺贈諸客」、皮日休「冬暁章上人院」や釋貫休「道中逢乞食老僧」など殆どお寺と僧侶と関連付けて詠まれている傾向が明らかである。それに白居易が西湖の湖畔の涼しさをかもし出す棕櫚の描写は平安中期以降の日本にも紹介され、愛唱されていたことも見逃してはいけない。

続いて宋代以降の棕櫚詩に目を転じてみよう。北宋の宋祁『景文集』[13]巻四十七 に「棕櫚竹贊」

（例７）葉棕身竹　族生不蔓

潮社。
[11]『松陵集』十巻、皮日休著、明末汲古閣刊本。
[12]『禪月集』十二巻、釋貫休著、藝文、1968 年。
[13] 宋祁『景文集』六十二巻、1983 年、台湾商務。

有皮無枝　實中而幹

棕櫚竹という植物を詠んだ賛である。のちの劉敞『公是集』[14]巻二十九「棕櫚」

（例８）蠹□影吒竿影直　雪中霜裏伴松筠

可憐憔悴凌雲色　還是昂藏獨立人

棕櫚をテーマにして詠んだ一首である。雪や霜の寒天下でも松や竹と同じく色を変えず、高く聳え佇んでいる。また、高名な詩人梅堯臣の『宛陵集』巻三十に「詠宋中道宅棕櫚」がある

（例９）青青棕櫚樹　散葉如車輪

擁籜交紫崴　剥豈非仁用

以覆雕輿、何憚克厥身、今植公侯第、愛惜知幾春、完之固不長、只與薺本均、幸當敕園吏、披割見日新、是能去窘束、始得物理親。

宋中道の邸宅に植えてある棕櫚を詠んだ一首である。青々とした棕櫚の木は葉っぱを広げてあたかも車輪のようである。「剥豈非仁用」と締めくくられているから､「仁用」は儒家の教えが込められている。単純な風物描写ではなかったと思う。また、劉摯『忠肅集』巻二十に「次韻唐誦植棕櫚三絶句」が見られる。次のようなものである。

（例１０）　その一

亭亭員榦直　翦翦翠輪齊

葉散夜叉様　惡名誰品題

その二

榮悴逐時序　紛紛紅翠多

誰同崴寒操　旁有羽林戈

その三

種蘭不當户　李以苦見容

珍重主人意　東亭非要沖

一首目は「翠輪」のような葉っぱが広がると「夜叉」のように見える。この悪名高い棕櫚はいったい誰が品評し、詩に詠むだろうか。二首目は寒い冬でも緑色が凋落しないゆえ、ほかの花木と違って不

[14] 以下の引用は文淵閣四庫全書による。

変な操を持っている。三首目は棕櫚を植えた庭の主人の心地に触れて締めくくった。韓維『南陽集』巻一の「新置北軒」は

（例１１）紛敷北軒植　移劚來中園
□雨一飄灑　咄咄芽蘂繁
輕黃吐雙蕉　寸碧羅叢萱
更憐二棕櫚　遠結蜀土根
清風落簷楹　翼羽何翻翻
惟此松竹姿　洒然出塵昏
衆芳自爭妍　正性中獨存
願秉歲寒操　翠色藹君軒

と詠んでいる。「更憐二棕櫚、遠結蜀土根」や「惟此松竹姿」「願秉歲寒操」から窺えるように杜甫の「枯棕」詩や君子の節操に譬えられる表現を踏まえている。洪朋『洪龜父集』巻上「題水陸院矮棕櫚」

（例１２）短短一棕櫚　葱蒨聊可悦
如何後歲寒　生氣未衰歇
脫身斤斧中　甘心形影拙
況歎風雨姿　拄□日已昳

この作品もまた忠心や志を変えない君子の譬えで棕櫚を詠んでいる。南宋に入ると、郭印『雲溪集』巻九に「棕拂」の作品が見える。

（例１３）一色棕櫚造　收成掌握中
青蠅應退舍　白鳥敢爭雄
便作晉毛用　祖師有龜 毛拂子　寧殊塵尾功世情分美醜達者自圓通

「棕櫚」で作った禅僧が煩悩や障碍を払う払子を詠んだ一首である。例７～１３の作品に描かれる棕櫚は大体、「歲寒操」「葉如車輪」「ハエを追う払子」など常套的な定型表現で捉えられていることといえよう。

さらに時代の変遷に伴って、中国で棕櫚を詠む手法や表現に変化が見られるかどうかを確認するため、南宋以後の元明清の棕櫚詩もいくつか代表的な作例を取り上げて見ておく必要があろう。元代

の方回『桐江續集』[15]巻十二に「簡鄭高士（真一）」は

（例１４）憶昔西湖北　閑尋隱士廬
水濵維舴艋　屋角認棕櫚
紅出仙人酒　黄披老氏書
寫真元有約　隔歲定何如
再見湖東岸　遷居傍廢城
鷺群窺釣石　荷氣馥菜杼
歉歲難羈旅　泥途厭歩行
幽懐徯清話　豈不向君傾

隠居の高士の住居の目印として「棕櫚」が詠まれている。唐詩以来の棕櫚のイメージを踏襲していることは明らかである。また、納延『金臺集』巻一「錫喇鄂爾多觀詐馬宴奉次貢泰甫授經先生韻」

（例１５）灤河涼似九龍池　清暑年年六月時
孔雀御屏金纂纂　棕櫚別殿日熙熙
青藜獨喜頒劉向　黄閣重聞拜子儀
千載風雲新際□　願將金石播聲詩

棕櫚が植えてある別殿のことであろうか。明王朝になると、王恭『白雲樵唱集』巻四の「村居」

（例１６）草徑茆扉帶軟沙　隔林雞犬幾人家
青山盡日垂簾坐　落盡棕櫚一樹花

静かな村風景の描写として花がすっかり散り終わった一本の棕櫚の木が取り上げられた。もう一首『草澤狂歌』にも

（例１７）渭水寒流秦塞晩　灞陵殘雨漢原秋
棕櫚葉上驚新雨　砧杵聲中憶故園
□處移家驚落葉　一年歸夢在孤舟

詩人は棕櫚の葉に降り注いだ雨音に驚かされたと詠んでいる。さらに巻二「經甘蔗州贈朱山人」

北風吹長林　林下白日曉
黄茅獠洞少人行　萬磧千峯絶飛鳥

[15] 方回『桐江續集』

臘盡山中霜正繁　長裾短□扣君門
棕櫚巷裏人烟僻　蔗葉籬中鷄犬喧
君家結搆連雲起　樓上青山下溪水
溪水東流竟不回　野花林路長蒼苔
澗中落落青石小　谷口曨曨錦樹迴
知君乆負青囊秘　前代曾楊共流輩
（後略）

と、棕櫚が植えてある路地裏には人の気配は少なく、サトウキビの茂る籬の中に鶏が鳴いていて、犬も吠えている。いかにも陶淵明が描いた桃花源郷の世界である。巻五「田家夜雨」には

山雨瀟瀟静掩門　績燈影裏戯兒孫
棕櫚葉上聲聲好　不似天涯斷客魂

棕櫚に落ちた雨の音が快く聞え、外遊せず、帰農した人の心境を一首で吐露している。やはり隠者の世界を描いている。唐文鳳『梧岡集』巻一「留方坑」

（例１８）茲行滯積雨　連日留方坑
棕櫚每多茂　鷓鴣時自鳴
山深氣猶冷　雲暝嵐不晴
年饑艱米食　尊空少醪傾
嚴刑禁侵漁　何由慰民情
應慚居撫字　報政當稱平

連日の雨でやむを得ず「方坑」という山中に留まった時に詠んだ作品である。当地の自然描写としていつも茂っている棕櫚と時折鳴いている鷓鴣（やまうずら）が捉えられている。邵寶『容春堂後集』巻十一「棕蒲二首」

（例１９）棕櫚根老久應捐　漫託昌陽為引年
露下髙天秋澗冷　山中人作水中仙

棕本栽蒲故有之　水邊石畔鬬新奇
相逢若問通仙否　直待形容變盡時

長年水辺に植えてある棕櫚を歌った二首である。「水中仙」「通仙否」と道家の理想的な人物「仙人」にかかわりがあり、世俗から離れた世界の一端と見ても差し支えないだろう。清の代表的な詩人王士禎の『精華録』巻七には「虚谷菴二首」

（例２０）三寸黄柑水浸渠　一林紅桂映棕櫚
鈎簾恰對中梁色　正好高眠讀道書
太息黄楊樹子前　琳宮幾歳飽風烟
交柯接葉真憐汝　未似先生厄閏年

南鄭至沔縣道中
黒水梁州道　停車問土風
沔流天漢外　嶓冢夕陽東
處處棕櫚緑　村村□秬紅
更須參玉版　脩竹賤如蓬

題名「虚谷菴」の「菴」からすぐ分るように、隠者の「いおり」を詠んでいる作品である。王漁洋は「三寸黄柑水浸渠、一林紅桂映棕櫚」と「處處棕櫚緑、村村□秬紅」と詠み、棕櫚の緑と「桂」や「□秬」の赤という色のコントラストに注目した。同じ清の譚吉『曝書亭集』巻九「和韻」

（例２１）宅西狷石舊名亭　曽侍先人説五經
夢想故園猶在眼　棕櫚一樹假山青

庭にある築山の辺りにある棕櫚を詠んでいる。また宋犖の『西陂類稿』巻十一「咏庭前花木五首」の中の一首

（例２２）誰傍踈籬種小桃　亂藤惡竹苦相交
年來手為芟除却　牆角棕櫚得並高

庭の花木を詠んだ作品で、垣根に高く聳えている棕櫚が歌われている。最後に査慎行の『敬業堂詩集』巻二十四に「篁歩　去衢州二十 里地産柑橘」を掲げておこう。

（例２３）百折金川水　東流下石門
碓牀聲不斷　炭隖氣長昏

小屋棕櫚岸　疎籬橘柚村
荔支方入貢　剰爾未移根

蜜柑や荔枝が育つ中国南方の描写に岸辺の「棕櫚」が加わる。見てきたように、例１４～２３の詩作に描かれた「棕櫚」は、のどかな田園風景の一こまの描写が殆どで、特にざん新な発想や人の意表を突くような今までになかった表現は見当たらない。

（二）「棕花」について

棕櫚は夏に花を咲かせ、その花を「棕花」という。盛唐の岑參『御定全唐詩』巻一百九十八の「東歸留題太常徐卿草堂　在蜀」一首は、「棕花」 を詠む最も古い作品であろう。

（例１）不謝古名將　吾知徐太常
年纔三十餘　勇冠西南方
頃曾策匹馬　獨出持兩鎗
虜騎無數來　見君不敢當
漢將小衛霍　蜀將凌關張
卿月益清澄　將星轉光芒
復居少城北　遥對岷山陽
車馬日盈門　賓客常滿堂
曲池蔭高樹　小徑穿叢篁
江鳥飛入簾　山雲來到牀
題詩芭蕉滑　對酒棕花香
諸將射獵時　君在翰墨場
聖主賞勲業　邊城最輝光
與我情綢繆　相知久芬芳
忽作萬里別　東歸三峽長

岑參のこの詩も杜甫の「枯棕」詩と同じく四川で詠まれたものである。「題詩芭蕉滑、對酒棕花香」とあるように、「棕櫚」と「芭蕉」を対で詠む中国最初の詩であろう。棕櫚の花の香にも焦点を当てている。晩唐の賈島『御定全唐詩』巻五百七十三に収められた「送獨孤馬二秀才居明月山讀書」に、「棕花」が再び登場する。

（例２）濯志俱髙潔　儒科慕冉顔
家辭臨水郡　雨到讀書山
棲鳥棕花上　聲鐘礫閣間
寂寥窗户外　時見一舟還

秀才が読書でこもった山中に花を開いた棕櫚に鳥が棲んでいると詠んでいる。時代が降って、北宋になると、韋驤『錢塘集』巻二

（例３）葉落不隨羣　花開亦趁春
初包蓮藥白　半折粟文皴
蜂蝶遥相笑　兒童冷不親
華丹君勿責　勁直在吾身

と「棕花」をテーマにした五言律詩である。きめ細かく棕櫚の花を観察し、季節、色の変化や周囲の反応まで捉えている。続いて黄庭堅は『山谷集』『山谷簡尺』巻上の手紙に

（例４）真珠菜淨濯去腥氣、入蔥白數寸、椎薑一塊、椒數粒、沸湯綽過、研五味壗醋食之、甚佳。棕花剥去皮及莖幹、取成塊者、湯中煮令熟鍊、薤油炒令香、下蔥薑椒醋水相半煮沸、入鹽醬甚美。此治二種菜食之殊佳、漫録上。庭堅頓首

詩こそではないが、高名で美食家でもある詩人山谷老人は手紙の中で美味しく「棕花」を調理する方法を詳細かつ丁寧に記している。唐代では庭木とされる棕櫚は、宋代に入ると、山谷のように、その花が食材として見られるようになった。非常に大きな転換といえよう。そして唐庚『眉山詩集』巻八「棕花」

（例５）斫破夜叉頭　取出仙人掌
鮫人滿腹珠　鮞魚新出網

「夜叉」の比喩はすでに述べた。鮫人の珠や鮞魚などで棕花を見立てている。やや怪奇趣味に流れるおそれがあろう。それから南宋三大家の陸游『劍南詩藁』巻三十八「戲詠山家食品」

（例６）牛乳抨酥瀹茗芽　蠭房分蜜漬棕花
舊知石芥真尤物　晩得蔞蒿又一家

疎索鄉鄰緣老病　團欒兒女且喧譁
古人不下藜羹糝　斟酌亀堂已太奢

さらに巻六十一「村舎雑興」

粥罷重投枕　燈殘起讀書
閉門常自得　作計更誰如
箭茁白於玉　棕花長比魚
盤飧有此味　勿怪食無餘

二首とも「棕花」を珍味として歌っている。黄庭堅以来の伝統を引きついている。陽枋『字溪集』巻十一にも「棕花」

（例７）滿株擐甲詫棕櫚　葉展蒲葵冬不枯
鬼髮擘開纖玉掌　蚌胎剖破細瓊珠
熟煨爐火香于笋　白飣盤銀美似酥
珍膳莫充禪客供　恐猜魚子放江湖

この詩は杜甫の枯棕、「夜叉」等の怪奇趣味や棕花の美味を集大成した一首である。元の劉詵『桂隠詩集』巻四「遊新淦興善寺和彭自強三首」その二

（例８）流水琮琤響澗磯　棕花芋葉與階齊
木魚晝静山僧出　独遶修廊□旧題

棕櫚の花と芋の葉は、寺の周辺にある景物として描き出されている。そして吴兆『御選明詩』巻三十三「武夷小桃源訪劉道人」

（例９）崢嶸入陷石　石徑轉逾窄
劃然洞門開　斜光一道白
龍湫流暗穴　鳥篆繡苔額
窮源有古村　二三避世客
避世非避秦　棲心鍊精魄
春田自耕刈　衣食無需索
風動棕花落　雨過藥苗摘
鶯啼林木秀　犬吠暮空碧
居然衆山中　遂與衆山隔
坐久恐迷誤　歸路誌前石

白雲洞口深　似杜重來跡

これも武夷に隠居した道人の桃源郷の描写の一場面として風に吹かれて静かに乱れ散る棕櫚の花が描き出されている。清の宋犖『西陂類稿』巻六「余家東齋棕櫚一株、花開最盛、偶讀岑嘉州對酒棕花香之句、悵然有作」

（例１０）三徑當年興不疎　幽花簇簇愛棕櫚

晴牕偶讀嘉州句　一倍春風憶草廬

詩の題詞で言ったように岑参の棕花詩の一句によって刺激され詠んだ作品である。

上で検討してきたように、黄山谷の手紙「棕花剥去皮及莖幹…此治二種菜食之殊佳」や陸游の「蠡房分蜜漬棕花」「棕花長比魚」に書かれたような、宋代では「棕花」を珍しい食材として詠むものが最も多い。元・明・清以降になると、例８～１０にある「棕花」は隠者や理想郷と思しきところの描写に使われている。

三、棕櫚（すろ）と和歌・俳諧

第二章で分析してきたように、中国では杜甫、岑参あたりの盛唐詩人から「棕櫚」に注目し、詩の素材として作品に詠まれるようになった。しかし、江戸時代の詩人棕隠の「棕櫚」詩の表現の面白さと新奇さは、中国の棕櫚詩と異質なものがあると感じられる。其れは果して棕隠独得な表現と手法を確かめるために、漢詩と違って日本固有の伝統文芸かな文学特に「和歌」や「俳諧」など韻文学に目を転じて、考えなければならない。

（一）棕櫚と和歌について

「棕櫚」という植物は早くも平安時代の源順が醍醐天皇の皇女勤子内親王の命令を受けて撰進した『倭名類聚鈔』[16]（931~938）に書かれている。次のような説明である。

棕櫚、唐韻に云く、棕櫚（𢌞閭二音）一名蒲葵。説文に云く、

[16] 諸本集成『倭名類聚鈔』、京都大学国文研究室編、1999 年、臨川書店。

栟櫚、以て蒘(ひ)と為(な)すべし（栟音并、今案ずるに棕櫚なり。俗に云く種路(しゅろ)）。

中国の『説文』や『唐韻』の知識を頼りに「棕櫚」の日本読みと漢語の表記を認識していることは明らかである。一方、和歌の盛んな時代に歌の素材として注目されなかったのであろうか。実際、試みに『新編国歌大観』の一字索引で調べたところ、二番目の勅撰集『後撰和歌集』[17]に「棕櫚」が登場する次の二首の応答歌が見える。原文と片桐洋一氏の注釈を掲げておこう。

前栽の中に棕櫚の木生いて侍と聞きて、行明の親王のもとより一木乞ひにつかはしたれば、加へてつかはしける

真延法師

1229 風霜に色も心も変らねば主に似たる植木なりけり

◇この棕櫚の木は常緑で、風や霜にあたっても、色も心も変わりませんので、まさにここの主の私に似た植木でありますよ。私のあなたに対する心は変わりません。

- 前栽　真延法師の寺の前栽である。
- 棕櫚　「しゅろ」の直音表記。南国系の鑑賞用喬木。ヤシ科に属し常緑。和名抄に「椶櫚」という字で見える。
- 行明の親王→１０宇多皇子行明親王は天暦二年五月に二十三歳で没している。
- 和漢朗詠集・上「子日」の項にとられている菅原道真の「風霜ノ侵シ難キニ習フ」のように松について言われることを棕櫚について言ったのが目新しい。

返し　　行明の親王（948 没）

1230 山深み主に似たる植木をば見えぬ色とぞ言ふべかりける

[17] 『後撰和歌集』新日本古典文学大系、P.371~2、片桐洋一校注、1990 年、岩波書店。

◆ 常緑で色が変わらぬ植木ゆえ主に似た植木だとあなたはおっしゃいましたが、ここは山深い所ですので、主である私に似た植木といえば、緑などではなく、まさに無色界そのものというべきでありましょう。

○ 山深み　行明親王は山に閑居していたことがわかる。

○ 見えぬ色　仏教で言う無色界。肉親から離れ、物質の束縛から脱して心の働きだけがあるという世界における色。

とあるように「しゅろ」が十世紀前半からから歌人に注目され、詠まれている。ここの真延法師と行明親王の歌のやり取りにあるように、仏法思想や心境に譬えられている。古来、仏教寺院の庭によく植えられていたようである。棕櫚科の植物は常緑で熱帯植物と思われがちであるが、実は昔から九州南部に自生する「和じゅろ」がある。葉の先が垂れて、垂れないものは「唐じゅろ」という。

もう一つは、『夫木和歌抄』[18]にある民部卿為家卿（1198~1275）の「貞応三年百首、木廿首」の一つ「すろの木、棕櫚」

14080 あさまだき　こずゑばかりに　音たてて　すろの木すぐる　むら時雨かな

芭蕉ではなく「すろの木」と時雨を取り合わせた発想は目新しいである。

もちろん、この前に『和漢朗詠集』に選ばれた白居易の「盧橘子低山雨重、棕櫚葉戦水風涼」（大曽根章介・堀内秀晃注：山に雨が降って、夏蜜柑のなり下がった実は一層重そうに見え、水の面を吹いて来る風に棕櫚の葉がそよいでとても涼しく感じられる）の佳句も平安歌人に刺激を与えたと想像がつく。

中世の『伊呂波字類抄』には、「栟櫚、椶櫚、蒲葵」と記し、「蒲葵」との別名が新しく付け加えた。

（二）棕櫚・棕櫚の花と俳諧について

棕櫚の歌は多いとは言えないが、しかし棕櫚を詠む伝統は和文芸の世界では脈々と中世から近世へ、つまり和歌から連歌そして俳諧

[18] 『夫木和歌抄』新編国歌大観による。

へとつながって行った。

とりわけ棕隠が生きた江戸を代表する和文芸「俳諧」によく詠まれる。次のような作品が見える。

（例１）163 すろ棕櫚の葉のあはひを通る秋の風[19]

（松永貞徳著『天水抄』[20]寛永二一（1644）年成立。）

（例２）496 すろ棕櫚の葉やさばへ五月蠅の神をはらひ祓払の具除

（顕成編『続境海草（ぞくさいぐさ)』寛文十年（1670）刊）

（例３）635 月の皮むくははきのうらや棕櫚問屋

（三千風編『松島眺望集』天和二年（1682）刊）

（例４）619 槿やあさがほかはほり蝙蝠たたくすろ棕櫚箒ばうき

（末若葉）

（例５）42 初雪の畳たたみざは（濁ママ）りや棕櫚＜シュロ＞箒ばうき

（智月：蕉門俳人、宝永五年（1708）七〇余歳で没か）

（例６）82 長尻の春を立たせて棕櫚の花[21]

（『夜半亭蕪村』）

『夜半亭蕪村』に「さぬきに三とせばかりありて、京へ帰るとて留別也。ことば書有。略」と注記。

（棕櫚の花：夏・南国に多いヤシ科の常緑喬木。初夏黄の苞よ

[19] 以下の俳諧の引用は蕪村を除いて、全部「古典俳文学大系」シリーズ、1970年、集英社によるもの。

[20] 俳諧書などの詳しい資料は『俳文学大辞典』、2008年、角川学芸出版や『日本古典文学大辞典』を参照した。

[21]『蕪村全集一』発句、尾形仂・森田蘭校注、1992年、講談社。

り大型の花序が出る。その形状が箒を逆さに立てたようなので、長居の客に箒を立てる風習を利かせた。→行きなずむ春を追い立て、棕梠の花が咲き始めた。長滞在の私に帰れと言わんばかりに。）

魚赤、たのふだる人の七回忌追福のために、しれるどちの発句を乞ひて手向ぐさとなすも、即讃仏場（乗）の因なるべす。

1615 梢より放つ後光やしゆろの花

（『新花摘』）

（例７）120 花棕櫚のくもりながらに昼過て 中垣の（百韻）

（例８）2816 棕櫚帚ばうき千畳敷へ持て出て

（嘯山・太祇編『俳諧新撰』安永二年（1773）刊）

（例９）522 壁銭＜ヒラクモ＞のうたれて逃るすろ棕櫚箒

（几董著『新雑談集』天明五年（1785）奥書）

（例１０）300 棕櫚の花葉にさわがれて哀なり

（鳳朗著、西馬編『鳳朗発句集』嘉永二年（1849）刊）

（例１１）2388 白くみゆる夜刃のかしらか棕櫚の雪

（貞徳予撰、貞室編『玉海集』明暦二年（1656）刊）

（例１２）363 前 芭蕉を

他 棕櫚

（重頼編『毛吹草』正保二年（1645）刊）

等の作品がある。『毛吹草』（正保二年）『増山の井』（寛文三年）、『滑稽雑談』巻之八・四月下・五十三「棕櫚花」、『和漢三才図会』[22]（正徳三年）などの俳諧書にも取り上げられている。棕花より箒を連想

[22] 『図説俳句大歳時記』全五冊、1965 年、角川書店。

するのは一番常套的な表現である。しかし蕪村の「背光」の想像は従来の俳諧の棕櫚描写から飛躍して新しい詩想を獲得した。中国詩の棕櫚表現を比較して一目瞭然なのは、俳諧の棕櫚描写はより自由で変化自在のように見受けられる。

おわりに

棕隠は詩の中で自分の棕櫚愛好を「棕癖」と言い、また「嘗愛棕櫚種幾株、自珍斯癖古今無」とも歌っている。つまり「古今嘗て無く、自分が唯一しゅろの木をこよなく愛した人だ」と詩を以って宣言している。言い換えれば自分は今まで知られざるしゅろの真の美しさとよさを発見した人である。中国詩に見える棕櫚の描写と比較するだけなら、確かにそう言えるかもしれないが、しかし先紹介した『後撰和歌集』の真延法師[23]と行明皇子の贈答歌を考慮に入れれば結論はそう簡単にはいかないようだ。

なぜかと言うと、才人棕隠と和文芸は全く無関係ではなかったようである。実は棕隠は幼年期に叔母と一緒に国学者・歌人の伴蒿蹊に和歌を習っていたことは周知のとおりである[24]。成人後も和歌を詠んでいた。俳人と交流の交流もあった。棕隠が後撰集のすろやすろの花の和歌や俳諧を知っていた可能性は高い。中国では余り例を見ない棕隠の棕櫚愛好とそれを面白い漢詩に稔らせたの背景に、日本独自な和歌や俳諧の豊かな感性と美意識を見逃してはいけない。

宋代以降中国では棕櫚を詩に詠ずる伝統は受け継がれていくが、しかし殆ど杜甫の「枯棕」詩を踏まえ、諷喩的な社会性を帯びているか、ただ白居易のような風景描写表現を超越することができず、終始月並調で詠まれ、新味に欠けている。「棕花」についても珍しい

[23] 明黄宗羲編『明文海』巻三百七十六所収の趙統「觀貝葉經記」によると、「寓能仁寺、日求觀其畜蔵貝葉經、又有樺皮經云、國初時胡僧自天竺持來後、又有遺僧自西域取來者。其葉似今日乾葦葉、青白色、質似乾椶櫚葉而更韌、綿濶可寸半許、長僅踰尺」と述べ、インドの古い経典は棕櫚の葉に似ている貝多羅葉というパルミラ椰子の葉に書写される。法師や仏教と棕櫚のかかわりは是に因んだのか。

[24] 詳しくは「好事儒者中島棕隠」参照、『森銑三著作集』第二巻、1971 年、中央公論社。

食材の描写が多い。結局、「美鬣」や「爛漫信天真」や「傲骨不勝描」など棕隠のような新しい棕櫚詩を生み出すことは出来なかった。「棕櫚」というささやかな例ではあるが、江戸後期頼山陽と京都詩壇をにぎわせた詩人中島棕隠の一斑を垣間見ることが出来たかと思う。今後もこれらを手がかりに、より全面的に詩人棕隠を考察して行く所存である。

参考文献

1.『中島棕隠集』上方藝文叢刊６、解題　野間光辰、1980 年、刊行会。
2.『詩集　日本漢詩』１２、解題　富士川英郎、1987 年、汲古書院。
3.『葛子琴　中島棕隠』「江戸詩人選集」６、水田紀久、1993 年、岩波書店。
4.「中島棕隠随筆」『露伴全集』第三十二巻、1957 年、岩波書店。
5.「中島棕隠の詠雪百首」「山陽と棕隠」、『森銑三著作集』第二巻、1971 年、中央公論社。
6.『中島棕隠集』解題補訂、野間光辰、『混沌』第七号、1981 年、混沌会。
7.「中島棕隠」『森銑三著作集』続編第二巻、1992 年、中央公論社。
8.『東瀛詩選』本文と総索引（全四冊）、高島要編、2007 年、勉誠出版。
9.『漢学者伝記及著述集覧』小川貫道編、1997 年復刻、東出版。
10.『文淵閣四庫全書原文及全文索引』1999 年、迪志文化出版。